

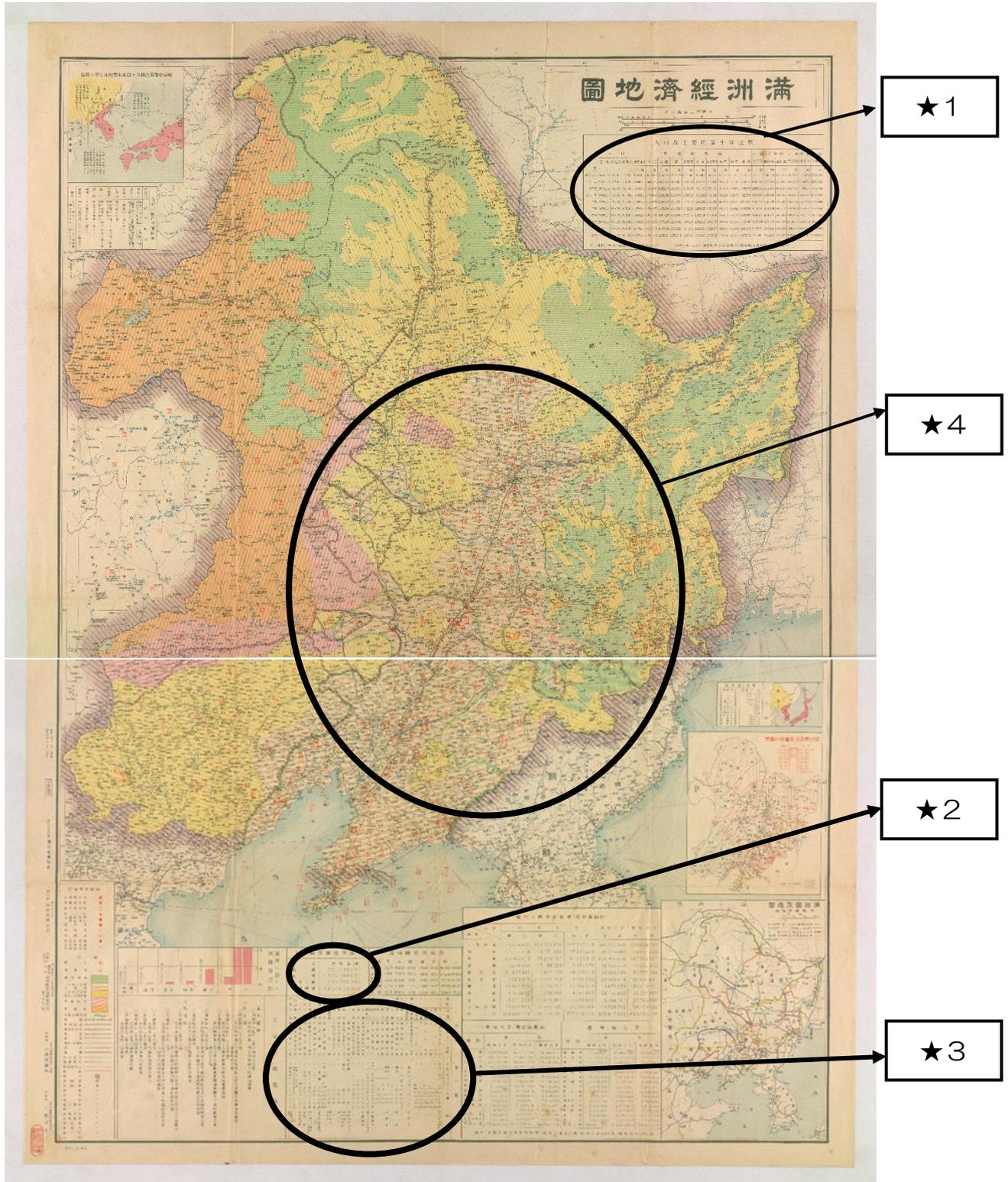
# 授業で使える当館所蔵地図

No. 20『満州経済地図』

作成年：1934（昭和9）年

サイズ：110×79cm

作者：東亞産業協會（発行所） 小林印刷所（印刷所） 小林又七（印刷者）



## 【解説】

満州国は、日本が1932年（昭和7年）に中国から切り離し独立させた国である。しかし、国際連盟で満州国の独立が認められず、日本が国際的に孤立していく要因の1つとなった。当時の日本では、「満州は日本の生命線」と考えられており、この地図からも、各地で様々な資源や特産物が産出されていたことが分かる。また、多くの日本人が移住していたこと、日本から複数の企業が進出していたことなども分かり、満州国が日本に果たした役割が大きかったことが伺える地図である。

### ★1 人口及主要産業十年比較

1923年（大正12年）から1932年（昭和7年）までの10年間分の、人口や穀物類の生産高、石炭の産出高などが記載されている。日本が満州国を独立させたのが1932年であるが、1923年の時点で満州に住んでいる日本人が10万人以上いることが分かり、その後の人口の変容から、日本が満州を重要視している様子をとらえることができる。

### ★2 主要鑛山資源埋蔵量

鐵鑛（鉄鉱）・石炭・菱苦土鑛（マグネサイト）・油母頁岩（オイルシュール）の埋蔵量が記載されている。単位の「吨」は現在の「トン」である。当時、満州の資源を確保することを、日本が目指していたことが理解できる資料である。

※オイルシュールを化学処理すると合成石油などができ、19世紀から燃料として利用されている。

### ★3 主要工業一覧

当時の満州には、多くの日本の企業が進出していた。この、主要工業一覧にも、「小松製材」「小野田セメント（現、太平洋セメント）」「昭和製鋼所」などの日本の企業が名を連ねている。資料に工場数や生産能力が記載されている点も興味深く、当時の産業の実態を伺うことができる。

### ★4 地図内の赤色の表記

地図のいたるところに、赤字で表記されているものは、農産物・水産物・鉱山資源など、満州各地で産出される特産物である。現在の地図でもイラストを入れるなどして表されているため、生徒・児童にとっても読み取りやすい資料である。多種多様の産物を確保できることから、「日本の生命線」と考えられていたことを理解することができるであろう。

## 【用語について】

### ・昭和製鋼所

第一次世界大戦から第二次世界大戦までの間、満州で活躍していた鉄鉱メーカー。私企業ではあるが政府・軍に統制され、国策会社の色合いが強かったようである。日本の敗戦により満州国が崩壊したため、昭和製鋼所も廃止された。

## 【利用の例】

○満州に住んでいた日本人の数や進出した企業を知ることができる。

→日本の満州進出を学習する時に、実際に移住した人々が増加していることが分かる。また、「小松製材」「小野田セメント」「昭和製鋼所」などの進出企業があることが分かる。

○満州で産出された資源とその量を知ることができる。

→満州では、様々な産物を得ることができたことが分かる。当時の日本の様子と比べるなどすると、満州が「日本の生命線」と言われたことが納得できる。